

# ギタリストの鮎川誠さんを蝕んだ膵がん 発生を高める6つのリスク

2人に1人が生涯に一度はがんを経験する時代です。幸い予後は改善し、5年相対生存率は60%を超え、3人に2人はがんを克服しています。ただ、膵（すい）がんだけは例外で、いまだに5年相対生存率が10%を切ります。死亡者数は、肺がん、大腸がん、胃がんに次いで第4位です。

今年1月、ロックバンド「シーナ&ロケッツ」のギタリストでミュージシャンの鮎川誠さんが膵がんで亡くなりました。最近ではプロ野球の闘将・星野仙一さんも、劇画家のさいとう・たかをさんも、膵がんでした。膵がんは難治がんの代表です。どんな兆候や症状があり、最新の治療はどうでしょうか。

膵臓は、胃の後ろで背骨（脊柱）の前に横たわる後腹膜（胃腸がある腹腔の背部の組織）臓器です。膵臓は消化液を分泌し、消化を助けるとともに、インスリンなどを分泌し血糖調整もしています。

膵がんのほとんどは、消化液を分泌する部分（膵管）から発生します。おなかの一番奥にあるため早期診断は難しく、しかも膵がんは小さいうちからリンパ節や肝臓に転移しやすく、症状がないまま周囲に広がります。

## ■ 5年生存率10%の難治がん

膵がんを治すには、早期に発見し手術するしかないのですが、結果として、膵がんと診断されたとき、約7割の人は手術ができません。

40代半ばの会社員Aさんは、診断の1年前から背部痛があり、近くの病院でエックス線検査などを受け「腰痛症」といわれていました。しかし痛みがなくならず、大きな病院でCTやMRI検査を受けました。その結果、肝臓に転移のある「膵体尾部がん」（膵臓の左側にできる膵がん）と診断されました。

専門病院に転院し、抗がん剤治療を受け、膵臓のがんはかなり小さくなり肝転移も見えなくなりました。高かった腫瘍マーカーも正常化し、背部痛も消えました。さらに治療を続けながら専門医チームと相談し、膵がんの手術を受けました。

手術でがんは取り切れ、発症から4年になりますが、抗がん剤治療を受けながら会社に復帰しています。

膵がんの3分の2は、十二指腸近くの膵臓で頭部と呼ばれるところでできます。ここにがんができると、黄疸（おうだん）（目や皮膚が黄色くなり、尿が褐色になる）や腹痛を発症することがあります。残り3分の1はAさんのように体尾部にでき、症状が出にくく、腹満（腹が張ること）や腹痛、背部痛が出ることがあります。

膵がんのリスクを高めるものに喫煙（相対リスク約2倍）、肥満（1・4倍）、糖尿病（1・8倍）、飲酒（1・2倍）があります。膵炎を繰り返す人も要注意です。遺伝もかなり関係し、親族に膵がんの人が複数いる場合は、膵がんリスクが高くなります。

ただし、膵がんの予防法はありません。現在、早期発見を目指し膵がんリスクの高い人を対象に、超音波内視鏡などで検査する研究が行われています。

治療に関しては、複数の有効な抗がん剤が開発され、良く効き延命する人も出てきました。まだ研究的治療ですが、Aさんのようにがんが小さくなり転移が消え、手術する人もいます。さらに、がん遺伝子パネル検査をすると、膵がん患者の4人に1人で新しい治療標的が見つかります。それに合った治療をすると、予後が2倍に延びました。膵がんの新しい治療法に期待が持てそうです。